

広島大学総合科学部報



“飛 翔”



1986年11月20日

特集：講義，こーぎ，コウギ，…

No. 31

広島大学総合科学部広報委員会

飛 翔 NO. 31

目 次

特集 講義、こーぎ、コウギ…

座 談 会	1
トピックス1 出席について “ワッハッハ大学論”	守田 靖 4
トピックス2 出席について “出席、欠席、遅刻について” …	山本 雅 6
トピックス3 講義をふりかえって “講義の味わい”	杉本 喜信 10
トピックス4 試験について	上里 一郎 12
トピックス5 体育の教官より “体育実技あれこれ”	高本 友彦 14
「授業時間割」の編成はジグソー・パズル?	角田 正文 16
外国語コースに関する素朴な質問	編 集 部 18
新任紹介 その1 今里教官・郭教官	20
卒 論 の 話	編 集 部 21
新任紹介 その2 加藤教官・要田教官	23
学 内 交 通 規 制	
黄色の柵	編 集 部 24
広島大学十年生	鳴戸 謙祥 25
新任紹介 その3 佐藤教官	26
図 書 室 ガ イ ド	編 集 部 27
シリーズ数字 その7	編 集 部 29
街 の 総 科	編 集 部 30
学 部 の 記 録	31
行 事 予 定 表	33
編 集 後 記	34

イラスト・内藤千恵美

表 紙・編 集 部

座談会

編集部

出席者

- 石橋 潔 (社文 3年) [石]
- 川上 知子 (環境 2年) [川]
- 中川 弘己 (1年) [中川]
- 中田 真帆 (1年) [中田]
- 高橋 先生 (地域) [高]
- 間田 先生 (社文) [間]
- 渡辺 先生 (情報) [渡]
- 長谷川先生 (環境) [長]
- 司会 吉田雄一郎 (飛翔委員) [司]



[司]今回「講義、こーぎ、コウギ…」ということで、座談会を設けたわけですが、その意図は、まず、「講義」という場が、学生と教官との接点となる第一の場所である、という認識から、そういった接点がいみじみだせないかということにあるわけですね。さらにまた、総合科学部という学部のユニークな特質が、「講義」においてどのようにあらわれるか、ということも見えてこないかということでもとあげたわけですね。

そこで、まず受講態度はどうか。学生側は、教官が一体どう思っているかわからないし、教官も学生がどういうつもりで受講しているか、案外わからないと思います。まず、そのうち遅刻、さぼりについて何かありませんか？

[石]あまり遅刻はしません。ただし、さぼります。遅れそうになったときは、出ない、という風に大体しています。よっぽど単位が必要である時は遅刻しても出ますが、遅刻は入るときの雰囲気も嫌だし、講義の途中に入ってこられたら自分も気が散るので遅刻するぐらいならさぼった方がいいと思っています。

[渡]一言で言えば、教官というものへの遠慮がそうさせているわけですね。で、教室がどんな雰囲気でも運営されているのかは、先生方によってものすごく違うと思うわけで、ぼくには想像の彼方です。ですから、ぼく自身がどう対応しているのかでしか言えない。ぼくは、遅刻は勝手にしてもらっています。一応出席

はとりますが、はじめに、ぼくの講義は全出席したとしても試験ができなかったら単位がない場合があるよ、逆にさぼったとしても大学生としてふさわしい解答の仕方をすれば、単位をつける場合があるし、Aをつける場合もあるよ、というてます。それでも出席をつける理由は、採点のときの参考までにとっているわけですね。だからぼくの講義では、学生が終わりの方でかけこんできて、出席簿に名前をつけても無視しています。

[長]ぼくも渡辺先生と似てるんですが、出席はとっています。但し、紙を回すだけで、人の分をつけても全く無視しています。じゃあどうしてとるか、といいますと、これは全く参考のためなんです。それで非常に興味があるのは、全然出てこなくても試験ができていたり、逆に講義に出てきても試験はさっぱりだめ、ということがあることですね。もちろん、講義の最初に、出席は試験に関係あるかもしれんし、ないかもしれんとは言っています。

[間]ぼくの場合はもっと徹底してて、出席はとりません。遅刻もさぼりも自由にやってくれ、ということです。まあぼくの講義よりも価値のあることは沢山ありますし、自分も学生の頃は、講義さぼって他のことやってました。ただぼくが希望したいのは、無為にさぼるといのでないなら、ぼく自身大したことやってるわけでもないから、さぼってもらって

結構だと思ってます。採点も、出てきた答案のみで判断します。だから、全く講義に出てきてなくても、きちんと書いていけばぼくは点を出します。仲々そういう学生はいませんが。ただし学生の方から、出席をとってくれ、出席点も考慮してくれ、と言ってくる場合もありますね。

〔長〕最初から聞いてくる学生もいますね。出席点はあるのかなのか。わかりません、と答える。(笑)

〔司〕高橋先生はその辺どうお考えでしょう。

〔高〕遅刻もさぼりも受講態度もおかまいなしでして、その点では皆さんと同じなんですけど、講義をうけるという所で、ちょっと意見があります。やはり、一応選択の余地はあるんですから、自分に興味あるような科目を学生が選択して、自分の意志でうけてもらえればいいんです。ただ、反面、単位をとらなければならないわけですね。ある程度単位をとらないと卒業できないという一種の強制もあるわけで、そういう強制的な面だけ重んじて、遅刻はいかん、さぼりはいかん、講義中は黙ってろということとはできない。それほどぼく自身、大した講義やってるわけでもないし、それに、どんな学問でも興味を自分自身で求めるという点が少しでもなければ、大学生にあれせい、これせいといっても全く無意味だと思いますから。それで、どういうふうに考えてますか、ということですが、ある程度私の講義に興味をもってくれる学生は非常に有難いんですけど、そうでなくて、出てきてもベチャクチャしゃべっているだけの人も、出てくるからには単位だけ心配してるんじゃないかと、やはり何かを求めているのだと思います。何を求めたらいいのかわからないけど、無意識に何かを求めているから出てくるんだと思うんですね。で、最初は講義に出てきてもうるさいばかりで、しゃべっている学生には嫌気を感じましたが、そういう学生に、さぼって家で自分の興味のあることをやれ、というのは、これはまた、おそらく今の学生には、過大な要求だと思うんです。だからさぼるより、しゃべってもいいから出てきてもらいたい、というのが僕の見解です。

〔司〕中川君はどうですか。

〔中川〕うーん。やっぱり講義に出て一所懸命話を聞いて、その時間おもしろく過ごせるのが、一番だとは思ってますが、少なくとも教室にいるとその雰囲気わかるんですよね。たとえば、自分で内職して、あとで友達にノート見せてもらっても、全く教室にいないのと、教室にいて、ふっと内職途中に顔を上

げたときに、こういう話をしてたなァというのがわかるのでは、大きく違うと思います。

〔渡〕ただ、講義というものが全面的に信頼できるのかな。(笑) ぼくも学生の頃、なぜ出なければいけないのか、判らなくなった時にはさぼったよ。特につまらないと思っただらね。

〔中川〕でも今の段階では、だんだんと見えてきているのは確かです。この講義はおもしろい、これはおもしろくないというのが。

〔間〕いや、2回から3回でわかるよ。(笑)

〔中川〕でもある程度習性とかもあるし、それは人それぞれだと思うし、自分としてはある程度興味あるものとして講義をとったから、一所懸命聞いてみたら、おもしろくなるかもしれない、という期待はあるわけです。

〔司〕中田さんはどうですか。

〔中田〕遅刻、さぼりは一切しないことにしてるんですが、それは、まだ、高校時代の、遅刻、さぼりは絶対にいけないんだという意識が尾をひいているんだと思います。「やっちゃいけない」という意識があるんです。

〔司〕川上さんはどうでしょう。

〔川〕やっぱり、確かに講義に出てても、話を聞いてなかったらテストは全然できませんよね。で、人のノートがあっても、わからないということもあります。私、一年生のときはすごく真面目だったんですよ。本当にさぼりなんかしなかった。2年生になっていろいろ忙しくなってから、自分の専門外のものにはさぼったりするようになりました。遅刻なんか途中から入ると先生の言っておられることがわかんないんですよ。で、さぼると次の時間言ってることが何だかわからなくなる。だけど、何気なく講義に出てみたりすると、おもしろいなあと思うものがあるんですよ。時々。それに、初め「なんだこの講義は」とか思って話を聞いていると、何となく自分がしたいナァということに関連したことを言ってる場合があったりするんですよ。ただ一方で、関係ない講義もあるんですよ。理系なんか相当難しいでしょう。講義聞いててもついていけないところがあるんですよ。とくに物理、数学関係は。だからさぼりとかは嫌ってます。

〔司〕前にメタセコイアか何かで、ある先生が書いておられたものに、遅刻をしてきた学生が教室に入ってくるときに、申し訳ないという表情をしてない、のっぺらぼうみたいだ、というのがありました。

学生はその辺はどうでしょう。

[川]なるべく目立たないようにしますね。

[長]ぼくは、今の話について、まあそういう方もいらっしゃるかもしれないけど、人の迷惑にならないければ、別に先生方に気を使う必要はないんじゃないかと思えますね。要するに、さぼるにしても、遅刻にしても、受講態度にしても、自主的判断の問題であって、それはあくまで人の迷惑にならないという範囲ですが、先生に対して失礼かどうか、というのはぼくは殆んど問題にしませんね。ただし、人の迷惑になるような場合はきびしい態度で対応します。

[渡]ぼくも、よくそれに似てるんだけど、ただ今話聞いてちょっと思ったのは、じゃあ学生が、終わりの頃に入ってきて、何とも思わんのか、といわれれば、ムカッとする場合が確かにあるわけですよ。それは、どんな時かと言えば、やはり自分でかなりいい話ができてるとか、思ってる時です。こっちも人間だから、今日はバツとせんなあ、ということもあるけど。で、一般的な話に戻すと、教室に対するモラルみたいなものを冒頭から期待する先生がいるわけですね。ぼくも多少そうですが、そして、その度合の強さによって、怒る先生と怒らん先生とに分かれると思うんです。ただ、ここでぜひとも言いたいことなだけども、大学にとっては、先生によってありようがそれぞれ違っている、というのはすっごく大事なことだと思うわけ。ベダンティックなモラルを全ての先生が、一様に、学生に押しつけるとか、逆にそんなのはどうでもいい、わかるやつだけわかればそれでいい、と言う人ばかりになるとかいうのでなくて、いろんな先生がおられるということが大学にとってよっぽど大事なことはないか。

[司]モラルの話が出ましたが、受講態度について、よく先生方から、学生の反応がにぶい、ということを聞くんですがその辺はどうでしょう。

[間]最近では学生の皆さん、どんな本を読んでいるんですか、ぼくはそれを聞きたいナァ。たとえば、流行になってる思想とか、そういう本について興味がある人は読んでいるかもしれないけど、それら以外については全然出入りしてないんじゃないの？おおよそ興味なんかもうとしない、という雰囲気があるんじゃないですかね。挑発的だけど、反応が鈍いというのは、知識なくして講義を聞くという雰囲気があるんじゃないかという気がするからです。こちら側としては、大学の講義で一から教えるなどというつ

もりは全然ないからね。

[渡]それはかなり本質なんです。結局、講義に対して求めるものをもってるとかどうかということなんで、本を読む、というのは結構しんどいことなんです。なんぼでも寝ころんどったら与えられるものが充滿してるわけですよ、今の世の中。そんな中で本を読む人は何がしか求めるものがあるからで、結局講義というものに求めるものをもって出てきているのですか、という問いをなさっているのと、ぼくはイコールだと思う。

[長]ぼくはかなり現実的な考えをもっているのですが、講義とは勉強するひとつの便法であると思うんです。だから受けること自体勉強であると、ぼくはそういう風に理解しているんです。もちろん学問の分野によって随分違うでしょうが、そこではかなり強制的に時間、場所が決められているわけですね。そういう強制力がなくてはなかなか物事はやれません。自由ではなかなか勉強できないものです。つまり、勉強なんてどうせ面白くないものだというのがぼくの持論です。まあ、そのうち面白くなるかもしれませんが、特に一番最初の段階で面白い、面白くないという点で議論するのは非常に危険だと思うんですよ。

[渡]僕も大賛成ですね。やはり一番最初のところでおもしろい学問などありゃしない。

[長]ぼくなんか特に基礎的な物理をやっていますが、おおよそすぐにおもしろいということは、期待できないと思えますね。よほど先生がおもしろければ別ですが。しかし、そのおもしろさは先生のおもしろさではあっても、学問のおもしろさではないと思えますね。勉強というのは元々おもしろくないものだ、という前提に立ってますから。

[渡]ただそこまで言い切ってしまうと、じゃあ今の学生に対して、本当に対応しきれないかということがでてくる。ぼくらは確かにエンターテイナーではないのだから、ただ学生をイスに座らせて話をしたって、それは本当のことをしているとは言えません。やはり基礎の段階では、砂をかむようなことを一所懸命やるところから学問のおもしろさって出てくるわけで、確かにそこを学生に伝えたいね。だけどその前に学生がおらんようになったらおしまいなわけで、やはりちょっとぐらいいおもしろい話もせなかんなどは若干思うわけです。で、結局、さっきの、学生は大学に何を求めているかという所に戻るわけだけど、この頃の若い人達は、与えられるものが多す

“ワッハッハ大学論”

地域文化コース3年 守田 靖

僕にとって大学とはまじめに勉強をしてはいけないところというイメージしかない。学生は、大学にきて勉強をしようなどという不遜なことを考えてはいけないのであって、ましてや、一週間の授業に全て出席したなどという聞くに恐ろしいことは、まかりまちがっても実行に移してはいけないのである。

大体、大学の教官というのは、しゃべらないでいたほうがよっぽど賢くみえるのであって、よほど心してかからないとすぐ学生にバカにされてしまう。出席をとると言えば、バカにされるし、とらないといってもやっぱりバカにされる。2回に1回とる人もそれなりにバカにされ、5回に1回しかとらなければ学生は気分がよければでていく。かくしてたいの場合、100人聴講したとすれば、普通教室を満たすのは10~20人、風がひどければ5人、雪が降れば3人、やたら暑ければ2人、とにかく寒ければ1人、さすがにゼロというのはきいたことがないから、そこは天下の広島大学である。などと思っていたのだが、最近学生の出席率が年々向上していて、何をしにくるんだか講義にでる学生がたくさんいて、少なくとも僕は、それに対して大変キョーイ（ここはドンとカタカナでお願いします）と疑問と、そして大なる憤りを感じているのだ、と一言つけ加えておこう。

講義というのは、基本的にはきいてもきかなくてもいいが、試験はしかしそうはいかない。講義にも出ず、教科書も無く、何かの手違いで不愉快ながらノートのコピーさえ無く、前の晩ついつい健康的に12時間も寝てしまって、寝すぎて頭のシンが痛むとかいうこともたまにはあるわけで、そうなるこちらは玉砕かくごでノコノコと試験室へと入ることになる。そこで発揮されるのは、ただ一つ、いかにして「見てきたようなウソをいうか」という能力だけであり、そんな答案でも“優”がでたりするのだから、やはり、人間最後まであきらめずがんばるべきだと思うか、世の中こんなもんだと思ってたけど、

やっぱりこんなもんだったと思うか、そこはそれ、人様々であろう。

試験の答案にしろレポートにしろ、目標はただ一つ、教官を楽しませることにある。判で押したような答案ばかりでは、教官の皆様もさぞ退屈でございましょうと慮るのおもんばかが師弟の情、学生の定め、仰げば尊し我が師の恩であって、ここは一番踏んばりどころである。大体、自分が教えた通りのことを書かせようなどという不粋なことを、一流をもってなる広島大学の教官が要求するはずがないので、我々はその心意気に十二分以上に答える意味でも、息も切らせぬ巻頭読み切り抱腹絶倒ラブロマンスコメディちょっと学術風といった文章を紙上に展開させなければならない。この勝負、「読ませた」が勝ちである。「おもろい答案だった」と思わせ、「たまにはこんなのもいいか」と思わせたが勝ちである。

仮にも大学のレポートである、という妙な遠慮はいらない。この場合、「大学の」は余計である。大体、「大学」なんて気軽に使うわりには、実体ははっきりしたもんじゃない。100人に「大学について論じよ」と言えば、100人とも違う答が返ってくるだろう。それくらい、いい加減なんだもん、何をやったとて、「道にそれてる」と文句を言われる筋合いはない。いや、むしろ僕は、大学4年間の内にかくに「道」という漠然とした、いい加減な標準値（根拠のない固定観念）からそれられるかというところに、正に大学というところに籍をおく意味があると思っている。

大学というのは、設備や建物や、講義に意味があるのではなく、その4年間という時間そのものにこそ意味があるのであって、基本的には何をしてもいいのだ。勉強するのも大切だけれど、勉強ばかりしては絶対においしいとこなのだ、大学というのは、と小生はそのように思うわけである。ああ、秋じゃ、秋じゃ。

ぎて、与えられたもんだけ食べることに慣れ切ってしまっていてね。我々が期待するような、全身で学問に立ち向かうようなことができなくなってしまった人がとても増えてるのではないかと思うのです。これを大学がどう克服するかというのが、大きな課題やね。

[司]それについて学生の方はどうでしょうか。

[石]僕個人としては、学問というものは最初から余りおもしろくないものだという主張には余り賛成しない。多分それは、大まかに言えば、理系と文系の差といってもいいんじゃないですかね。特に、僕は社会科学やってますけど、社会科学は講義で先生の言ってることと自分の関心が合致するかしないかで、その講義がおもしろいか、おもしろくないかがある程度きまるわけです。だから問題意識が全くずれていることをとらとらと話されても、こっちがその問題意識をもってないと、全然おもしろくないわけです。ただ問題意識がズレているからハイそれまで、というんじゃなくて、学生の側としてはやはり一所懸命考えて、あらゆるものを自分の問題意識にとりこむ努力っていうものをもっとやらなきゃいけないと思います。しかし、基本的に社会科学をやっている人間にとっては、問題意識を共有できる、できないが、講義のおもしろい、おもしろくないを決定するもので、共有できない講義には出ません。

[渡]講義においても、そういうふうに対応してくれると話がかみ合うわけで、それなら、あなたの問題意識をもう少し聞かせてくれというふうに、それに沿って議論できる。やがて話してる間に自分のベースにひきこむくらいの見識は、意外と教官はみんなもってるかもしれないよ。だから、そういう発言は確かに講義をよくする1つの糸口であると思うね。だけど学生が、はじめから問題意識が違うから聞かぬえといったら、あーそうかい、と教官は言いたくなるだろうね。(笑)

[長]問題意識というものはかなり高級ですね。問題意識という意味は、意義を感じているか、いないかということなんでしょ。それで意義を感じないというのはどういうことかという、ひとつには、対応できないという能力の問題、もうひとつは、全く自分の発想とは相容れないということ。そういう二重の意味があると思います。だから、自分の問題意識に合致する、しないで、出る、出ないを決めるのは、ぼくは非常に狭いと思いますね。もしそうだとすると、一生その問題意識から出られないんじゃないか

な。

[石]そこは、さっきも言ったように、自分の問題意識は限られたものである。という自覚はありますから、それを広げる努力はやりたいと思ってます。しかし、総科っていう所はかなり講義の選択の幅が広いわけですよ。そこで、自分がどう選択していくのか、と言われた場合に、どういう問題意識を見出しているかという所で判断せざるをえないと思うのですが。

[渡]だけど、問題意識という言葉が学生の口から出てくるのはこちよいいことだね。それは、自分の意識というかね、物に対する取り組み方への誇りというか、自信を感じるからで、そういったものを放棄したと思える学生はいやだな。

[間]石橋君がそうだというのはわかったけど、他の人はどうなの？一般的には君とは一寸違うんじゃない。僕の社会文化の今までの経験から言えばそういう意識でえらんでいる人は余りいないと思うんだけどね。特に一年生はどう思うわけ？

[中川]うーん、レベルの差を感じますね。与えられるのを待っているのかもしれないけど、まだ問題意識みたいなのを探してる段階ですね。

[渡]問題意識をさがさなきゃ持てないというのは、本当は不幸な事態なんだよ。さっき、与えられるものが多すぎるといったでしょ。でね、僕は、人間の問題意識とかいったものが一体どこから発するか、といえば、ひとつはね、「満たされない」という所から発するんじゃないかと思うんですよ。例えば、子供の時にね、何もない、退屈だ、さあ何をしようかという状況。僕、小学校のときは学校から帰ってきたら何もすることがなかった。おかあちゃんが御飯作ってくれるまではね。だからその間に夕焼け見たり、木にとまってるアリをいじくったり、あるいはいかにコントロールよく木に石をぶつけられるか練習したりね。だから、僕らより上の世代の人間はみんなあの夕焼け空の色の変化を知ってますよ。退屈から逃れる方法を自分でみつけるしかないわけです。そういう所から人間が根源的にもちうる物事へのあこがれとか、満たされないことに対して耐えながら、それを克服するエネルギーとか出てくるのだと思いますね。今では、子供の頃のこの退屈という大事なものをテレビなどに奪われ、空腹はお菓子やジュースに奪われ、ただ与えられたものを上手に食べる能力で大学に来たという面が確かにあるんじゃないか。だから、多くの学生が、学問に対する自

発性をもてないことも、一概に学生をとがめられない。むしろかわいそうだとも思う。大人が求めるものを探さなきゃいけないなんて、みじめな話じゃない。ただ、だからといって、君達かわいそうだね、といってみても始まらないのだから、そういったことをお互い理解し合った上でね、糸口みつめて一緒に学問を作っていかんといかんわけです。ぼくが昔、メタセコイアにデカルトの『方法序説』を読めということを書いたのも、今の若い人達があえて学問にとりくむキッカケをみつけるとしたら、やっぱりね、物質をどう見るか、人間をどう見るかという方法をみつけ出し、正しかったかどうかは別として、世界を理解する原理を感じとった時のデカルトの喜びね、そういったものを彼自身の言葉からききとる。そういう営みを若い人達が持つことが、少しでも我々との間を近づけ合うことになるのではないかと真剣に思ったからなんです。

[川] 実際、私は、大学に何かやりたいと思ってきたわけですよ。で私は、それは結構具体的なもんやと思ってたんだけど、実際いろんな講義に出て話を

聞いているうちに、自分のやりたいことというのは抽象的なんやな、というのがわかってきたんですよ。でも、問題意識があって、自分は、これがこういう風にやりたいからこれに出て、これには出ん、というのもあったけど、今は正直いって模索中なんです。私は環境のⅢ群に行こうかと思ってるんですけど、それに関連なさそうな講義でも、それぞれ何となく自分のやりたいと思ってるものに関連があって、何となく、これも勉強したいな、あれも勉強したいなと考えたりするんですよ。今は。だから、それが自分に合わないとかいうことは、余り自分が考えてないからかもしれないけれど、わからないし、それぞれの先生のやっておられる研究自体にひかれるところがあるんですよ。地層とかに興味がなくても、講義に仕方なく出ているうちに「あ」と思うことがあるんです。だから私は、何かを求めて—それは欲しいというんじゃなくて—そしてそれで何かを得たい、というものをもって出ているつもりなんです。

[渡] それは非常に素直ないい方だと思うよ。ぼくさ

トピックス2 出席について

出席、欠席、遅刻について

外国語コース（英語） 山本 雅

大学での授業に関する欠席や遅刻の問題に関して、このような記事を書くこと自体既におかしいのである。授業は授業予定に従って進められているし、開始時刻は定刻である。学生諸君は授業に欠席してはならないし、遅刻してもいけない。このことに何の異議もない。諸君は、授業が面白くない、やる気がしない、だから欠席し、遅刻するのだ、それをなくしたければ、面白い授業を、目のさめるような講義をせよ、それをせずして規則で縛り強制的に出席するのは間違いだと主張するかもしれないが、それは思いあがりもいいところだ。そもそも人間は強制されないと何も出来はしない。私は今まであちこちの大学で学んできたが、そこでの授業はみな強制であり、イヤなことを無理やりやらされた。学生の時には特にドイツ語の授業がイヤで苦勞した。クラスには欠席する者、脱落するものが続出したが、私は将来大学院に行きたいと思っていたから最後までがんばった。今では、あの時ドイツ語をやっていたよか

ったと思っている。学問＝強制である。

君たちが今こうして、出席しなければならぬ、遅刻してはならないと強制されるのはある意味では幸せなことなのである。広大に来たくても来れなかった者たちのことを考えてみるがいい。日本の国家は君たち一人一人のために年間280万円の血税をつぎ込んでいる。君たちの授業料だけで広大はやっているわけではない。たしかに、長い勉学の過程においては、君たちも疲れ、たいぎくなる時があるであろう。だから、時には欠席したり、遅刻したりすることもあろう。それは人間的なことであり、仕方のないことだ。しかし、いつもそうであってはならない。いつもそうなら、それはそもそも大学に来る資格はないのである。そのような者は大学を去って、自分の好きなことを勝手にやればよい。大学における欠席、遅刻はあってはならないことである。欠席や遅刻したい気になったら、上のことを思い出し、あくまで良識に基づいて行動してもらいたい。



っき、今の学生さん達とぼくらの違いを強調したけどその反面ね、僕達が若い時もっていて、今なくしてしまったものを学生さん達が少しも変わらずに持っているんだなあって痛感する面も多々あるわけね。さっきのはその上での話なんです。

[問] ぼくらの若い頃と共通する感覚をもっているという話ですが、ぼくは、それを自分で鈍くしてるんじゃないかなあという気がしてるんです。要するに、さっきから出ているように、与えられるものが沢山ありすぎて、結局その中に埋もれてしまって、自分のすぐれた感覚みたいなものを磨けないという面があるんじゃないかと思うんです。つまり、まわりに物があふりすぎて、自分でそれを器用にわかってしまうという側面が強んじゃないですか？

[川] 確かに、いろんなものがあつていろんなものにぶら下がっているから、どれにつかまっていいいのかわからんというのはありますね。

[問] うん。だから、つかまる場合もね、結局こう短絡的に、器用にパッパッと渡り歩くという雰囲気があるんじゃないかな。いわゆる優等生的な対応に終始して、本当にわかってないんだけど、わかっているような顔をして遊んでいると……。

[川] うーん、わからない。

[長] さっきから、「今の若い人は」という話が出ましたけど、およそ今から二千年以上も前にソクラテスも同じようなことを言ったんですね。「今の若い連中ときたら……。」と。たぶんそれからずっと繰り返し繰り返し言われたことではあるわけですよ。今の時代ではそのベースが若干早いのかもかもしれませんけど。

[司] 若者論にいつてしまったようですが、まだ大学に入って間もない1年生はどうやって講義をえらんだのか、講義を自分にとってどういう場として位置付けているのか、その辺の所を聞きたいのですが。

[中田] 講義をどうやってとったか、という点ではや

っぱり、便覧に書いてあることとか、先輩の意見とかが大きかったです。

[問] 単位を簡単に出すとか出さないとかそういうこと？

[中田] わりと先輩は、これが楽勝科目だ！と教えてくれる人が多いんです。でも意外に思ったのは、そうした一年生の中でも、楽勝でつまらないのよりも、大変でもおもしろい講義をとりたいという人が多かったですね。

[川] うん、それは絶対言えると思う。

[司] 自分にとって講義とはどういう場なんだろう。

[中田] 高校時代の授業という、テストのための授業みたくて、社会でも理科でも答えが1つしかない、という感じだったけど、大学では、こういう論理もあるとか、先生の価値観が入ったりして、何か考える勉強が始まったな、という気がします。

[司] 物事を考えるキッカケとなる場ということですね。

[中田] はい。

[渡] ちょっと整理しなくちゃならんことがあつてね、実は講義には二つの面があると思うんですよ。例えば、物理学でいえばニュートンの運動方程式のようにね。それは学生には、おもしろいもへちまもあらへん。マスターしたらしまいやけど、わからんかったら全く先に行けんわけです。そういうのと、同じ理系でも、例えば、生物学などは多面性をもっていて、分子レベルでの生命科学という側面からは、さっきのと全く同じ局面がいっぱいあるわけです。その反面、生物というのは随分色んな姿かたち、生活様式をもったやつがいっぱいいるわけですね。これにできるだけ広く、深く通暁して全体を体系づけていく仕事、これも大変な学者の仕事ですよ。そやけど、知らんかったら先に進めん約束ごとみたいなのはあんまりない。中学生でもおもしろがられるところから、いくらでも奥深く進めるわけです。当然講義のあり方も随分変わってくるわけです。で、学問としてどちらが貴いということはありません。どちらもとても大事なんです。ぼく、よう知らんけど、文系でも基本的な約束ごとのありかたは、分野によって多様なんじゃないですか。

[問] ええ、技術的な知識がなきゃいけないということもありますね。

[渡] だから、大学で学問にとりくむ学生は、ただ面白いとか、とっつきやすいとかではなくて、まず、そのところの違いがわかってないとね。この2つ

を混同したら話にならないわけです。

[司]理系の中でも2種類あって、やりにゃいかんことは好き嫌いにかかわらず、やりにゃいかん部分がある、ということですね。そうすると哲学をやってらっしゃる高橋先生はその辺どうお考えでしょうか。

[高]もちろん、自分で批判的に考える力があつたら、一切、哲学の歴史や語学など勉強しなくてもいいわけです。ヴィトゲンシュタインという哲学者も他の哲学者の本を余り読んだことがない、という話を聞いたことがあります。知識というのが、かえって邪魔をする場合があるわけですね、哲学なんかだと。知識をもっているだけでは、単なる哲学史家になってしまうわけです。ただし自分で考えるためには、そういった、口を開けていれどもらえるような知識は妨げになるんですけども、全く知識なしに自分で思考できるのは天才だけに許されることでして、僕の場合なんかだったら、哲学の場合でも、それなりの知識というものがなかったら思考は進められないわけです。ただ基本は自分で考える、ということですね。

[司]講義に関しては興味をもってもらおうというのが前提にあるわけですか。

[高]そうですね。自然科学系でもそうだと思うんですけど。しかし、例えば、ギターをひくのと同じで、最初からひけなかったら全然おもしろくないわけで、その意味では、「ひっぱたいて」教えるということも無意味なことではないと思います。まあ、そんな仕方では、大学の講義を行うことはできませんが。

[長]例えばスポーツなんかやる場合確かにそうなんですけど、ただ走るだけとかいう、ばかげた基本を、毎日延々と繰り返すわけでしょう。講義にもそういう面があることをぼくは言っておきたいわけです。それを、おもしろいかおもしろくないとか、あるいは意義は何かとか、最初から考えるのは非常に危険だと思いますね。繰り返しになりますが、講義とは、ひとつの便法である、というのが僕の考えですね。

[渡]ぼくもそれは大賛成。先生がただおもしろい話をするのを学生が期待する、というのは何も大学でやる必要のないことです。ただし、それぞれの分野ごとに講義を魅力的にする工夫が必要ないとはいきませんが。

[司]今までの話をまとめると、講義を、おもしろい、おもしろくない、という観点から選ぶのは非常に狭い。講義にもいろいろあって、どっちが意義があり、どっちがないというのは一概にきめられない、とい

うことだと思いますが、ここで少し、“総合科学部における”ということ意識して話をして下さい。総合科学部は幅広く講義をとれる、ということですが、その辺のところ川上さんどうでしょう。

[川]私は、一般教育では細胞生物学はもちろん、微積分学とか線形代数学とかを必修としてとりましたけど、実際自分の行きたいと思ってる環境Ⅲ群にこういうと思ったら、細胞生物学なんかはかかわってくるけど、線形代数学とか微積分学とかはあんまり関係なくなっちゃうんですね。物理学をやるには必要かもしれないですけど。ただ今考えると、役に立ってるかもしれない。人文・社会系とかもね。元々、自分のやりたいことに沿って講義をとるんですから。

[渡]あなたは3年になってから生物をやるんだと思うけど、1年生のときから、こういう学問をするんだ、という意識を持つことができた？

[川]いやあ、それがね、反対に散らばってっばっかりみたいで……。

[渡]それを持たないというのを幸福と感じた？

[川]いろんなものに手をつけ、いろんなものをやってしまったって、ほうほうに流れて、実際、これ、というものが余計わからなくなったんですね。

[渡]しゃべっていい？(笑)ぼくは、人間ってそんな高級な動物だとは思っていないんですよ。だからね、例えば、学生服を着ているとポルノ映画館に入りにくいのと同じで、自分がどんな装いをしてるか、ということに随分規定される。そういう意味ではね、自分が理学部の動物学科に入ったとしたら、勉強せんでも何となく、動物学って何かを考えにゃいけんあと思いつながら一般教育をうけておるわけね。これとても大事なことですよ。ところがね、総合科学部の場合にはそれがもてない。実に僕、これすごいハンディキャップじゃないかと思ってるの。つまり人間は、そういった帰属意識にしばられてようやく



何かができる場所があるのではないか。

〔長〕 ぼくも同感ですね。自由というのはその反面、非常に大変なことなんです。

〔間〕 自己規律が伴わないといけないから、その部分が今の学生は欠けてるね。

〔川〕 理学部の講義をみせてもらったんですよ。いったい、どんなのかと思ってね。でもね、全然講義内容が違います。それを見て、自分はこういうことがしたい。だから、あれも関連してる、これも関連してるっていう、いろんなものに手をつけてしまった結果、大きいものが見えなくなっていると感じたのは確かです。いろいろと手を伸ばせるから総科で勉強したいと思ったんだけど……。

〔渡〕 たしかに、それゆえ総科でこそいいものが出てくる可能性もあるわけです。ただ、出てくるかもしれないけど、何もなくなってしまう場合もありうるからこわいねえ。(笑)

〔間〕 今、彼女が言ってることを逆に言えばね、ぼくら総合科学部において、講義をどうやるかという問題にかかわってくると思うんですよ。たとえば僕は法律をやってるんだけど、ミニ法学部ではだめだ、という意識があるわけね。いわゆる総合科学部として法律を教える場合には、法学部でやっていることをマネしてはダメなのね。時間数もたりないし、科目だって少ないから。だから、もっとうまい講義の仕方はないかということをいつも考えるんですが、そういったことが、今、彼女の言ったことの裏がえしとして教官側にあるんじゃないですかね。

〔司〕 今まで、総合科学部の自由な講義選択における問題について話が出たわけですが、理系の人の話が多いようです。文系の方はどうなのでしょう？

〔石〕 今日のこの場、というのが、何か親父から叱られているみたいですね。(笑) 一方から啓蒙されている、という感じだ。

〔間〕 いや、それに反論しなきゃだめよ。われらは違うんだ、という所をさあ。

〔石〕 ええ、だから、反論します。僕自身は、総合科学部っていうのを百科事典的に使ってるっていう感じなんです。つまり、自分の問題意識というのは学部の中でもつ場合もあるんですが、学校の外やいろんな生活をしていく中で、どうしても納得したい、ということが出てくるわけです。それをどうにかちゃんとしたい、と。そういう時に総科に來れば、自分が納得したいと思っていたものを講義の中で選んでいけるというメリットがあるんです。そういった

意味では、広く浅くなる、という欠点を伴うことは十分承知しています。今、自分自身広く浅くだなあと感じてあせっているところです。とにかく、普通の学部だったら、カリキュラムで決まったパターンを与えられるわけですが、総科の場合、自分で選択しなきゃいけない。そこが総科のいいところであり、悪いところでもあると思いますね。

〔間〕 総合科学部の講義というのはね、例えば法律の話で法学部と比較してみると、法学部は徒弟制なわけね。ひとつずつ積み上げていくような。それに比べて総科は自由放任だという気がするわけ。だから、その長所を最大限に生かす努力を、学生も教官もしなきゃならない、という気がしますね。

〔司〕 広く、浅くという話が出ましたが、この辺について何か、本当に広く浅くなのでしょう？

〔先生数人〕 分野によるんだよなあ。

〔間〕 法律の講義で苦勞するのはいつもそこなんです。なるべく深く議論しながらも、かつ法学部にまけないような広範囲の議論をどうしたらできるかと、毎年苦勞の連続なんです。まだ成功したためしがないけど。

〔渡〕 僕の、実験系の立場で言えば、やっぱり3回生ぐらいになったら、かなり自分の専門分野の基礎固めをやってもらい、4年生では卒論の実験研究をやって論文書きまで指導する。だからものすごく大変だよ。だから、4回生の卒業間際になって、「やっと先生の言うてはったことの意味がわかりました。」と言ってくれると、これは成功だったと思わないといかん。

〔間〕 それは社会文化でも事情は同じだと思いますよ。だから今、浅いところを卒論で深める、というのが建前なわけ。

〔渡〕 実験系の場合、そういう形の講義の仕方なり、訓練なりに耐えきれなかった人というのはなかなかしんどいことになる。

〔司〕 高橋先生はどうですか。

〔高〕 地域文化の中では、おそらく、哲、史、文とかいう狭い枠にとらわれずに、いろんなパースペクティブからものを見ると、たとえその先生が深められなくてもおもしろい結果がえられると思います。とりあえず1つの結果として、卒論という形でおもしろいものを書く余地はあると思いますね。広く浅くかもしれないけど。

〔司〕 さて、ここで専門の自由選択という制度について触れたいんですが、例えば政治学をやっている人

講義の味わい

地域文化コース4年 杉本 喜信

このタイトルにいささか困り果てている。総科に在籍すること4年半。この困惑は、バイキング料理でおなかを一杯にしたあと、「さて、お味はいかが？」と問われたときの戸惑いに似ていなくもない。

勇んで食べた皿。全く手をつけられなかった皿。食べてみるとそうでもない皿。あと味のすばらしい料理。口あたりの良いもの。辛過ぎるもの。冷めかかったもの……。人それぞれに味わった料理も異なれば、全体を通しての評価もまちまちなのがバイキング料理だろう。

振り返ってみれば、2年生の春。これでもかこれでもかと講義題目の並べられた便覧を前にして、「いったいどうしようか」と迷ったのは、料理の山を前にした際の心境と同じだったように思う。

1年次。他学部生が決められたコースに従って食前酒を飲みはじめる頃、私はどのコースとも決めかねて、おっかなびっくりいろいろな酒をなめていた。「総科生の迷う楽しさがうらやましい」とは、どの学部の友人だったろうか。

結局、私は年間を通じて最も刺激に満ち、興味深かった講義に魅かれてコースを決定した。実際に料理の並ぶ部屋に入ってからコースを決められるのは、見本だけで選択を迫られるのに較べて失敗が少ないというものだろう。私は総科を選んで良かったと思った。

2年次以降はよそ事に熱心だった。私の場合、それはサークル活動であり、全く講義は聞かず、試験だけ受けることも多くなった。

そんな中でも、「いい講義」に巡り会えた日には感想を記したりもした。ノートを見返すと、私にとって印象深い「いい講義」には、たった1回こっきりの他大学の先生によるものが多い。たぶん、永年にわたって研究してきた分野のエッセンスと最新情報が、入念な準備の上で語られるからだろう。「言葉にすればほんの一言でも、その裏には大変な労力が隠されていることがわかった」などとノートにある。七面倒臭い語学や数学を乗り越えてでも、その世界に飛び込みたいと思わせる講義が私にはうれしかった（語学と数学専攻の方、ごめんなさい）。

ところで総科のカリキュラムは柔軟性に富んでいとされる。そのためか、何をしたらよいかわからないまま、私のような学生は易きに流れやすい。

しかし、ただカリキュラムの充実を図れば問題が解決するというものではなからう。ただ形式的に必修単位を増やせば画一性が増すだけである。ただ闇雲に、幼児を卓に着かせても、料理は減らないのと同じだろう。子供の舌は正直である。私はカリキュラムと同様、あるいはそれ以上に、ひとつひとつの講義に工夫を凝らしてもらいたいと思う。

「大学の先生は教師としては素人」と感じることも多い。4年次、教育実習に出かけた。福山付属の先生からは何度も何度も「生徒の反応を見なさい」と注意を受けた。後ろの生徒のことも考えず黒板に小さな文字をピッシリと書いたり、小さな声でつまらなそうに授業をすれば、「内容以前」と叱られた。「先生の側から生徒を拒否している」というのだ。

しかし、千田に帰ればこんな講義が堂々と横行していた講義内容ではなく、教授法で学生にD（不可）宣告をされている講義の多いこと多いこと。全く手をつける気にならない料理である。

本当に旨いものを食べようとするなら、料理人とのコミュニケーションが不可欠だろう。講義は研究室を訪ねるためのきっかけにしかすぎないという人もいる。学年が進んでからの実験・演習やゼミでは、自分が料理らしきものを作ることになるのだから、その中で腕や舌を鍛えておく必要もある。

また、料理は一人で食べてもおいしくない。先輩も後輩も、そして先生も一緒になって作り、ワイワイ言いながら食べるのが最高だ。バイキング料理なら隣のテーブルの友人もちらりと覗いてみたい。そんなサロンのような雰囲気的空間が総科には必要だと思う。先輩や先生の刺激が多ければ、「何をしたらよいかわからない」こともなくなっていくだろう。

味わいを言葉で表わすのは本当に難しい。講義の味も言い尽くせるものではない。しかし、年々味覚は鋭くなっていくような気もするのである。

間が、突如物理をやりたいなくなったとします。そうすると総科では他コースを自由にとれるから、ひとつ物理をとってやれと思って聞きにいくと、何が何だかチンプンカンでわからないということもありうるわけです。つまりそこには、講義のレベルを先生方がどの辺におくのかという問題があると思うんですが、その辺はどうでしょう。

〔長〕ぼくの場合は、おおよその基礎的な素養は仮定してやっています。それはある程度しかたないと思っていますよ。だから例えば、物理、数学に関しては高校生レベルを求めていますね。だから、そういうのがない学生がきたら対応しきれないと思いますね。

〔渡〕それはしかたないんじゃない、分野によっては。

〔長〕ただし、レベルで言えば理学部よりは下げていますかね。

〔渡〕それから、僕の場合ね、専門で他学部から19条でとりにくる学生がいるわけね。で、彼らには、僕の話のベースがわかるか、と最初にききます。そうして基礎的なことがわかってない人には僕は、こういう本を読めといって、わかりやすい本を与えます。それくらいはするよ。

〔間〕文系も同じでしょう。比較的理系よりはとつきやすい、というぐらいでさあ。

〔司〕それでは、それを埋めるのは学生の努力しかないということですか。

〔間〕そうでしょうね。それは教官のところにいけば、渡辺先生のように、これを読んでみろとかいうアドバイスがおそらくあるだろうからね。

〔司〕では、最後にですね、総合科学部における講義とは、自分にとってどういうものと思っているかを一人一人おっしゃって頂きたいのですが。

〔石〕少人数でやってほしい。今まで出た講義でもおもしろいと思ったものは、やはり少人数の講義です。だから初め関心がなくても、少人数の場合、あれがどうだ、これがどうだと言ったときに答えが返ってくると、それが専門外でも、よし、ひとつそれに関する本でも読んでやろうかという気になりますね。そして、そのことについて多少なりともくわしくなったりすることがあるので、ぼくは少人数制であってほしいと思いますね。それから講義の進め方ですが、人それぞれいろんな問題意識があると思うんです。だから、そうした問題意識に近づけて話をするような講義をしてもらいたい。でも全ての分野の講義でそうすることは不可能でしょう。しかし、歴史の講義、例えば中国の近、現代史であれば、その講

義の中で経済関係のやつがいれば、日本の侵略時の経済関係はどうやったんかとか、また、法律関係のやつがいれば、法律的にはどうなんや、と聞いたりして講義することが可能なんです。だから確かに、突然、物理の講義にいて物理の先生に、社会科学に結びつけて話をして下さいなどというのは、とうてい無理な注文ですが、分野によっては、多少なりとも出てきてる学生の問題意識に近づけるような、そういう講義は可能だと思います。だからまとめれば、少人数であって問題意識に近づいてくるような講義を望んでいます。

〔間〕ぼくの場合、いつも専門の人数は少ないので、できるだけコピーでいろいろな資料を配って、議論しながら本当はやりたいんですけども、それほどみなさん勉強してない。でも、できるだけ少人数のメリットを生かした講義をやりたいと思いますね。だから、どんどん質問してもらっていいし、議論してもらってもいい。それから、講義については、僕自身の経験だけど、非常に若くしてお亡くなりになったある憲法の先生が言うんですけど、その先生の一般の講義では、例えば終戦直後から憲法成立までの、歴史的に非常に短い期間を一年かかってやるわけですね。非常にこまかく歴史を追いながらという風にして。で、ぼくはその講義に非常に感銘をうけて、おもしろいナアという経験をしたんですよ。で、先



生が自分の問題意識を、事実を整理しながら、ここはどうなのかと学生につきつけてくるわけです。そういう風な講義ができればいいなあと思うんですが。仲々行政法といいますと、公務員試験ということで受ける人もいるので、ある程度技術的なことをおさえておかななくてはならないわけです。それは、やり

たい講義像と矛盾するわけで、その二つを統一した講義ができないかな、いつも思っています。

[司] 1年生の人はまだよくわからないかもしれないけど、総合科学部の講義で、いいと思うところはありますか？

[中川] まだ、総合科学部の中しか見てなくて、比較

トピックス4 試験について

情報行動科学コース（人間行動研究） 上里 一郎

大学での授業（とりわけ一般教育科目）は学生諸君にとっていったいどのような意味をもつものであろうか。大学のかかげる理念はともかく、多数の学生諸君にとっては修得しなければ進学できないから、ないしは卒業できないから余儀なく受講するというのが現状であろう。例えば悪いが治療意欲の乏しい患者に似ている。そこで、講義の選択の際には、フロイトの快楽原理をおもわせる“最小のエネルギーで最大の効率を”が幅をきかせることになる。すばらしい授業をめざしての席取り競争は苦笑をとりこして怒りをひきおこすことさえある。

聴講届に登録するためにエネルギーを使い果たすのであろう。その後は疲れをいやすのに数か月かかるように授業へ身体は出席しても、触発されて、何かを求めてエネルギーをかける者は稀である。とはいっても、期末にはかなりの緊張と努力の日々をすごすようではある。ところが、試験が終われば仮りの学びは霧散してしまう。学生諸君は単位以外に何を学んだのであろうか。

ここまで書いたら学生諸君のツバキがきこえてきた。大学の授業の工夫のなさ、教え方が下手だ、何故このような単位を修得しなければいけないのか……これではやる気がおこらないと。

教官も現状を座視している人はすくない。いろいろ工夫もし、努力している。私も私なりにどうすればよいかとあがき悩んできた。

あげくここ数年は授業や評価の様式がほぼ固まってきた。勿論これが最善で今後変わらないというものではないが、その要点はいくつかあげられる。

講義を受身で受講することをできるだけ打破できないものか。これが第一のねらいである。

第二に、生きた知見や態度を修得するために体験

を通して学ぶ機会を提供する。この第二の意図を実現するために、前期に2回、後期に2回程度レポートを課している。それをまとめるために、本を読み、観察し、実験をおこない考えまとめるという一連の作業をすることになり高見の見物はできないのである。学生諸君は、被験者を得ることの困難さ、人間の多様さ、行間を読むこと等々について、その人なりに学んでいるようである。レポートから悲喜こもごもの反応がかえってくる。こちらは読むのに苦笑と汗をながすことになる。

第三に、できるだけ授業へ関心や自我関与を高めるために、単なる概説はさげ、人間が生活のなかで当面する問題を取りあげ、それをどのように理解し考え対処すればよいのかを一緒に考えるよう努めている。

このような方法で授業を重ねていくと、学生諸君は自発的にドロップアウトする。したがって、期末の試験にカケル諸君は伝統的な授業に比べて半減する。自分で採点し結果が見えるからであろうか、お互いに結構なことではある。

成績の評価は、出席状況、レポート（2回）、期末試験の総合点でおこなっている。総合点の55%～60%以下には確信をもってDをつける。それ以上は合格である。しかし、Aはかなり厳しい基準でつけている。おそらくAをつけられた諸君は“Aがついてあたり前”と思っているのではあるまいか。それほど努力した跡がくみとれる、私が教わることもあるレポートを提出している。

全体の15%ほどであろうか。これに出会うために授業をしているようなものである。これが授業への意欲を支えてくれる。教師も学び支えられているのである。

対照できないんですが、大学の講義を聞いてみて、高校と変わらないなあ、という講義もあれば、講義でしゃべりまくる先生もいて、好きなことをしゃべって気楽だなと思うこともあります。(笑) いや、そこがいいんでしょうけど、高校までだったら理路整然として頭からすうっと入ってくるのがいい講義だったから、そういう風に評価しちゃうところがまだあるんですね。

[中田] やっぱり同じような感じで……。

[司] ここがおもしろかったとか、講義で感じたものは何かないですか。

[中川] 高校では全部押しつけでしょ。大学では、受けてみるまでわかんないんですよ。どんな講義か。受けてみてはじめて、「あっ、こういうものか。」とわかる。

[渡] 僕は、今、自分の学生時代のことを考えたんだけど、教授から余り学んだという記憶はない。でも講義は結構ききましたね。とにかく、本人が主体的にとりくむかどうかの問題なんだけど、ただ、カリキュラムというのもとても大事だと思うね。どういう基準を学生に与えるべきかということを、我々は十分に考えないかんわけで、カリキュラムから伝わる、学問に対する教官の自信とか誇りが結局、学生を鼓舞するのだと思う。それから、自分にとって総科における講義とは何か、という問いに答えると、自分が今、研究しててとってもおもしろいから、それを学生に伝えたい。若い人達に伝えたい。まず、そのための場であるということです。

[長] どうあるべきかといわれますとね、学生にとってはやはり最大の勉強の場であるべきだと思います。その中で、何がおもしろいのか見出すチャンスもある。ぼくが気にしていることは、基礎的な科目っていうのは、興味がわくとか、意義があるとか、そういうのは仲々わからんということです。実際にやってみればおもしろいもので、いろんな意義があるということもわかってくる、ということですね。それともうひとつは、おもしろくなかったら反面教師的に使うというのもひとつの手ではありますね。あの先生の講義はおもしろくないから、自分で勉強しよう。今、本はいくらでもありますから。まあ、いい意味でも、悪い意味でも講義を参考にする、というのは非常に能率のいいことだと思いますね。その中から何か学びとってもらえれば幸いです。

[川] 私としては、先生それぞれ研究してこられたことがあるんですから、その先生の個性的なところを

みたい、先生が今までやってきたの中でここがおもしろいというのをみたいです。それは、すごく難しいことですが、ただ努力すれば、総科だったら、いろんな先生のそういう所がみれると思うんですよ。それは他学部についてはできない、総科のよさだと思うんですよ。また、総科の先生方自体、いろんなものを、いろんな視点で見てらっしゃると思うんですよ。そういう中で、自分に近いものをみつけていきたいと思いますね。難しいことだし、知識があるし、今の自分ではどうしてできないかもしれないけれど。

[高] 総科の講義のいい点というとはよく言えないんですが、自分の講義について言えば、倫理学の講義では、自分の言っていることをすべて覚えてもらおうなんて思わないですね。それは極端に言えば正しいとは思ってませんから。にもかかわらず、何を学生に期待しているかということ、まず興味をもってもらうという点と、もう少しつこんで言えば倫理学なら倫理学で問題を扱う手法というものがあるわけですし、そうした手法を覚えてもらいたいです。いいかえれば、これは、批判的、分析的な物の見方のことで、これは大体決まってくると思うんです。そうした態度を身につけてほしい、と思いますね。総科全般のいいところへと話をひろげれば、ふつう倫理学でも、それを専門的にやろうとすると非常に細かい



体育実技あれこれ

保健体育講座 高本 友彦

「これほど体を動かさなくなったのは、人類始まって以来」とのスポーツ医学専門家の指摘をまつまでもなく、われわれは、いつのまにか体を動かさない生活になれきたようである。運動不足が心身に及ぼす影響について、ここで論ずるつもりはないが、運動不足の好例があるので紹介しよう。宇宙飛行の人体に及ぼす影響が各方面から問題化されてきた頃、1965年8月、ジェミニ5号が8日間約200時間に近い宇宙飛行を行っている。そのとき搭乗した2人の宇宙飛行士が地球に帰還した直後精密検査を行った結果、足の骨からミネラルが約20%減少しているデータが得られた。<子どもからの赤信号 NHK取材班>このことは、デ・トレーニングの状態下では骨からミネラルが減少することを示し、逆にいえば、健全な骨を保つには、毎日適当な運動を行う必要があることが明らかになった。運動不足気味の諸君にとって警鐘ともなれば幸いである。少なくとも体育実技の時間は思う存分体を動かして欲しいものである。

まえがきが長くなったが、小生が保健体育の授業を担当して30年、この間、時代とともに様変わりしてきた体育実技のあれこれを、思いだすままに綴ってみよう。

総合科学部の前身である皆実分校に赴任してきた昭和30年、当時の体育実技はすべて自由に個人が希望する曜日・時限に種目選択ができる制度がとられていた。従って、特定の種目に受講希望学生が集中し、早朝から長蛇の列、受付開始と同時に窓口に殺到しガラスが破れることもあった。それが現在のように学部・学科指定による種目選択に変わったのは昭和35年頃からである。まだ当時はバレーボールは9人制、しかもバスケットボールをはじめ、全ての種目はグラウンドで行われていた。

実技種目のなかで、テニスといえばそれまで主流であった軟式テニスに硬式テニス加わったのはミッチーブームの頃からであり、現在では新しくバウンドテニスまで行われている。また、女子学生を対象とするダンスは、創作ダンス、フォークダンス中心から、最近のジャズ体操に人気集中してきたこ

となど、やはり時代の流れといえようか。昭和45・46年に体育館・プールが建設されたことにより、バレーボール、バスケットボールは勿論、バドミントン、バウンドテニス、卓球、柔道、水泳など種目も多くなってきた。

次に変ったものとしては服装があげられよう。殆んど白一色であったユニフォームから、東京オリンピックを契機として流行しはじめたスポーツウェアが一般に普及するにつれ、学生諸君のカラフルなユニフォームが目立つようになってきた。スポーツシューズについても全く同様である。

現代はモータリゼーションの時代といわれるが、大学もその例外ではない。構内またその周辺の自動車、バイクの数がそれを如実に示している。これらの交通機関を利用する学生の増加にあわせて交通事故による見学、欠席者が増えている。不幸にもそれが理由で残留または再履修を余儀なくされる学生も決して少なくない。くれぐれも安全運転を願いたいものである。

さて、話題は少し古くなるが、皆実町から千田キャンパスに移転してきた当初は、現在の本部事務局の建物付近はバレーコートであったし、それと並んでテニスコート、バスケットコートなど球技場としてかなり整備されそこで授業が行われていた。しかし、その後の学生定員増や総合科学部の創設などによって、プレハブの研究棟・教室の建築があいつぎ、いまでは昔日の^{おもかげ}弟はどこにもない。

最後に、西条キャンパスに構想されている体育施設について述べておこう。去る9月、ソウルで行われた第10回アジア大会の開会式をテレビで観た諸君も多いと思う。あれ程豪華なスタンドは望むべくもないが、入場行進が行われた陸上競技場と同じ全天候グラウンドが予定されている。ほかにテニスコート、サッカー場、ラグビー場、野球場、屋内プール、総合体育館、球技体育館、武道館の施設計画もある。これらの諸施設に対応して多くの実技種目が開講されよう。そこで潑刺と躍動する諸君の姿を想像するにつけ、一日も早い実現を念願するものである。

ところまで議論しなければならないけれども、総合科学部の場合は、そこまで立ち入る必要はないわけで、それぞれの、問題の取り扱い方、見方、パースペクティブをおぼろげながらもマスターしてもらえればいいわけです。まあ倫理学だけでなく、いろんな講義からマスターしてもらえれば、自分なりの何か1つの興味というものを発見したとき、それをいろんな手法からつっこんでいけると思うんですよ。だから、そういった点を学生に期待したいん

ですね。

[司] こういうことは結論などなかなか出ないものですが、学生と教官、それぞれがどんなことを考えているのか、少しは明らかになったと思うし、講義の本質、そこにおける問題点が少しは浮きぼりになったのではないのでしょうか。まずい司会で、あまりまとまりがありませんでしたが、今日はみなさん、どうもありがとうございました。

(文責 吉田雄一郎)



「授業時間割」の編成はジグソー・パズル？

学務第二係 角田 正文

授業計画の進め方は「授業計画流れ図」のとおりですが、授業時間割の編成はジグソー・パズルに似ています。総合科学部では、年間約1900コマの授業科目が開講され、ひとつの授業科目が1 piece にたとえられます。

総合科学部の学生には、4年間一貫カリキュラムが編成されており、いずれを専攻する学生でも各自の進路に関する授業科目が、順序よく受講できるように時間割を編成します。又、広島大学の全学部の学生には、所属する学部的一般教育の履修基準のもとに各自の必要とする授業科目が、1・2年次の間に受講できるように編成します。教官の申し合わせによる割当（専任教官は週3日以上授業を受け持ち、1回は1・2時限を担当すること）、各学部が1・2年次の間に履修すべく開講している専門教育科目の授業時間帯を避けての編成、学生に人気のある一般教育の授業科目への対処、開講される授業科目の曜日・時限のバランス等、一つひとつの授業科目が関わりを持っていて、正にジグソー・パズルの piece そのものです。

総合科学部の時間割編成というジグソー・パズルは、専門教育がコース・群別に編成され学務第一係が担当しています。又、一般教育は専門教育が編成された後を受けて、分野（系）・外国語・保健体育別に編成され学務第二係が担当しています。合わせて約50セットのパズルはそれぞれが関わりを持っているので、総合的に判断し一つひとつの piece（授業科目）を適切に配置させる為、各系の時間割担当者は一人に限定します。担当者は、一人でも多くの学生に対して希望する授業科目が受講できるように、学生の立場に立って編成しています。

学生主体に編成された授業時間割は、1次案として教官に検討を依頼しますが、ほとんどの教官はこの時点で初めて、次年度の各自の担当する授業時間帯を知らされます。教官からの変更希望に対して、時間割編成に影響が無いよう慎重に検討しながら、授業時間割の修正・調整を行います。時間割担当者は、種々ある変更希望の中でも曜日・時限の変更希

望への対応に苦慮しています。その理由が止むをえない場合、時間割編成に影響を与えない時間帯があれば検討して頂き、それ以外は他の教官に変更をお願いすることになるのです。しかし、変更を希望された教官に対してお断りするケースが多く、担当者にとって最もつらい時期と言えます。

授業時間割の第2次案に対する修正・調整を終えて、教室を必要とする授業科目の教室割振りを行います。教室割振りもジグソー・パズルに似ています。ひとつの授業科目が1 piece に該当し、各授業科目の教室を決定する作業は、各 piece を配置していくことと何ら変わりません。piece（授業科目）の配置（教室）を決定させる要因は、各授業科目の受講学生数の予想、視聴覚教室使用希望の調整、授業内容により希望される教室の配慮、研究室及びセミナー室使用の可否などが上げられます。

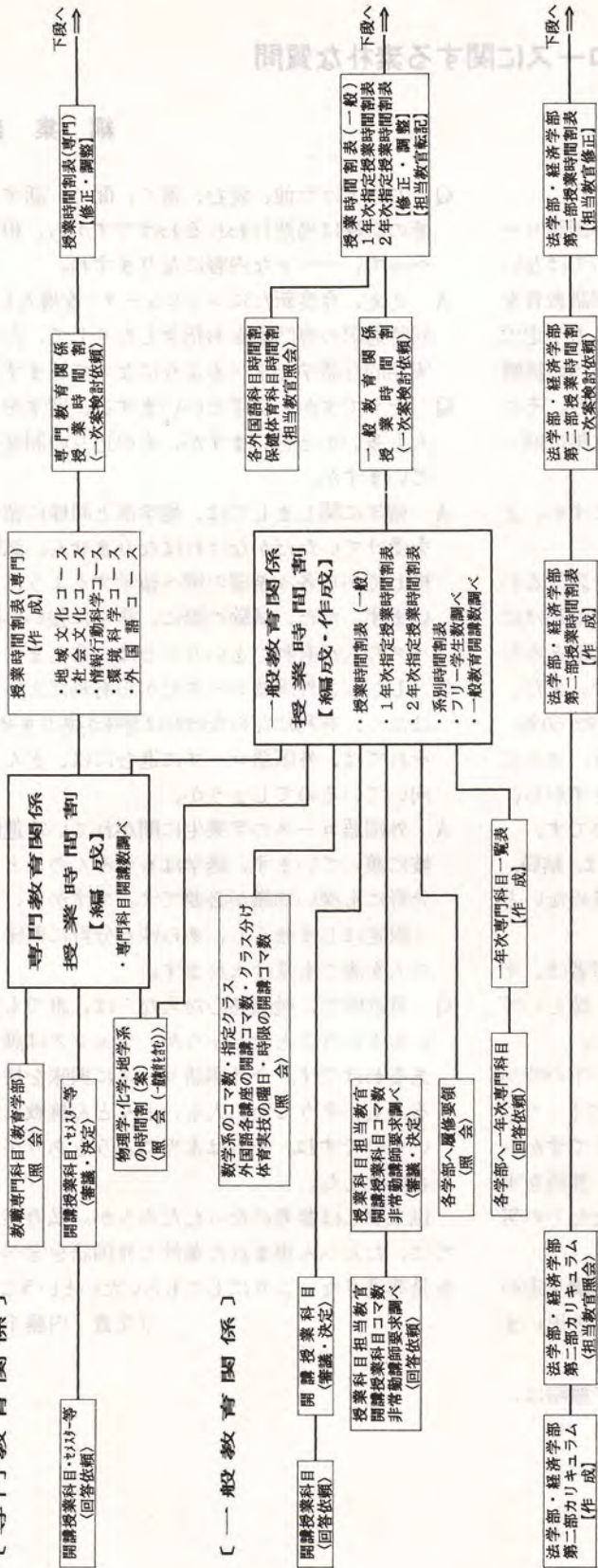
教室割振りというジグソー・パズルは、月曜日から土曜日まで22のケースがあり、ひとつのケースに1日以上費やすことも希ではありません。

時間割編成時には、各曜日・時限において自由に受講できる授業科目の学生数を調べ、適切な受講者数になるよう編成しています。しかし、各授業科目の受講学生数の予想が非常に難しく、過去の受講者数を参考にして教室を決定します。また、総合科学部の教室稼働率は92.0%ですが、3・4時限目以降のそれは98.2%にもなります。時間割編成時には、各曜日・時限の開講コマ数を把握し、教室不足にならないよう編成していますが、教室数にゆとりがないので適切な教室割振りは困難を極めます。適切に割振りされた授業科目が少ない程、新年度の授業開始後になって教室変更にも追われることになり、学生諸君にも不要な負担をかけることとなります。

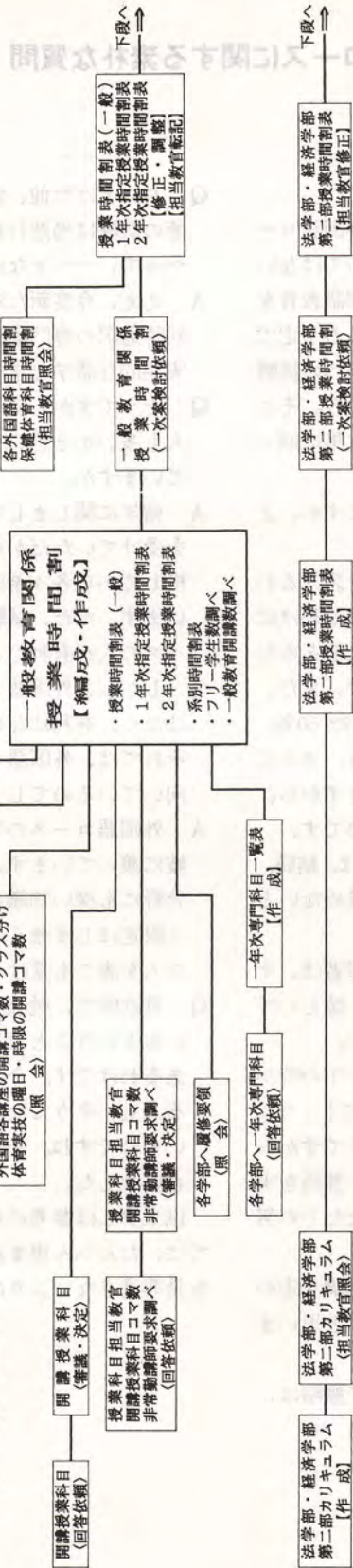
以上、およそ半年かかってジグソー・パズルが完成しますが、ミスなく時間割編成され、また、教室変更が少ない割振りなど、本当に完成されたものであるや否や、真価が問われるのは新年度の授業開始後で、学生により診断されます。それ迄、時間割担当者は、不安の日々を過ごすことになるのです。

《授業計画流れ図》

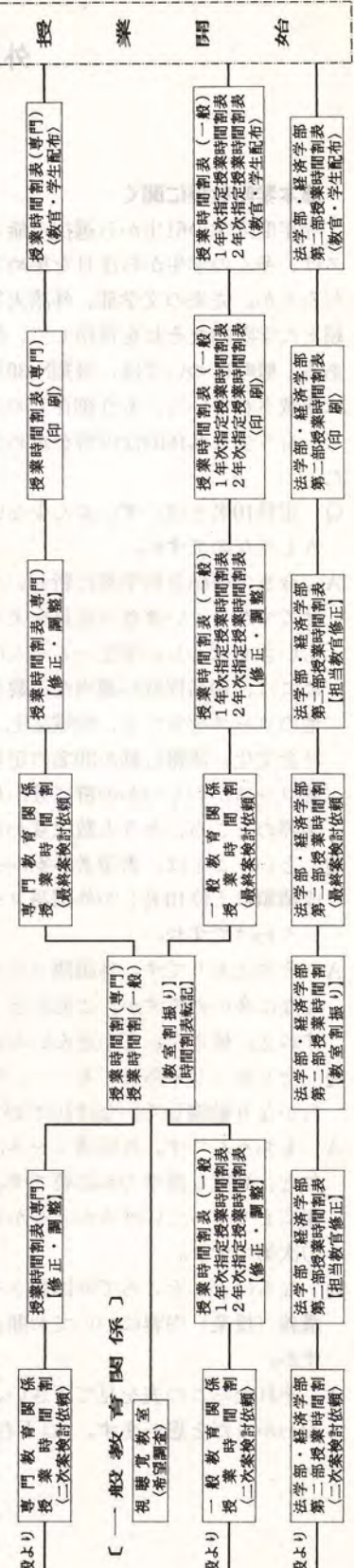
〔専門教育関係〕



〔一般教育関係〕



〔専門教育関係〕



〔一般教育関係〕

